

# 第7回 「日本語大賞」

わたし      つか      ことば  
テーマ「私が使いたい言葉」



中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

## よか言葉

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校

2年 吉田 菜々穂

大爆笑。お互いを叩き合う手が痛い。隣の部屋から、もう寝たはずの祖父の咳払いが聞こえる。それに驚きはしたものの笑いは止まらず、三人で布団の中に潜り込み、声を殺してずっとフルフルと震えていた。布団の震えが静まったのは、その五分ほど後だった。

夏休み半ば。私は妹と二人で祖父母の家へ泊りがけで遊びに来ていた。そして満喫した一日目がもうすぐ終わる頃、妹の提案で、私と二人で祖母の部屋に乗り込むことになった。灯りの消えた暗いダイニングを忍び足で抜け、そっと祖母の部屋のふすまを開けて中へ入った。祖母は案の定まだ起きていて、私たちを快く布団の中に入れてくれた。夏用の布団とはいえ、かぶっていると、夏の独特の蒸し暑さが余計にこもった。そしてそれは、ドキドキして鼓動が早くなった二人が加わったことも関係しているようだった。

「ねえ、ねえ、何話すん？」  
慣れない夜ふかしに興奮しているのか、妹が真ん中に挟まれた祖母をゆらした。

「怖い話にせえへん？」  
と私がいたずらっぽく言つと、妹は

「せやな、せやな。」  
と足をばたばたさせた。そして二人の視線は一ヶ所に。

「おばあちゃん、怖い話してー！」  
祖母は、

「じゃあね、じゃあね、『耳なし芳一』の話を話してあげるね。」  
と答えた。普段の生活では聞き慣れない、不思議なイントネーションで。そう、祖母は、鹿児島出身で、私たち関西人にはまるで外国語のように聞こえる言葉話す。

「いつつその話やん。」  
と、妹は不満そうだが、表情は明るかった。実は聞きたいのだ。何せ、私たちの祖母が語る「耳なし芳一」は、とっても面白いのだ。だからこの話は、私たち三人の中の定番。祖母が私たちをぐいっと抱き寄せ、声を潜めながら語り始めた。

「むかあしむかし…」  
おどおどとした声色で、物語は始まった。私たちはもちろん、祖母ももうノリノリだ。

「ほろん、ほろんと話を…」  
効果音の妙な実体感、祖母の不思議なイントネーション、何よりその場の雰囲気、何とも言えず可笑しくて吹き出してしまふ。そしてそれにつられて祖母も言葉を詰まらせながら笑

っている。そして起こる、大爆笑。祖母が発した「ぎーっ」という謎の効果音と共に私たちの興奮は一気に高まり、三人で布団に潜り込んだ。そして冒頭に戻る。

「あ……。よか夜じゃあー……。」

そう呟くのは、やっと笑いがおさまって顔を出した祖母だった。そして、呟かれた言葉、「よか」は、祖母の口癖だ。

「おばあちゃん、今日めっちゃ『よか』って言ってるなあ。」

「めっちゃっていうか、いつもやんな。」

二人で祖母に詰め寄った。マイペースな祖母は、私たちの言葉には答えず、

「よか人生じゃあ……。」

とだけ言った。なんだか深い言葉だった。

「おばあちゃん、『よか』って何なん。」

という妹の問いには、私が答えた。

「『良い』って意味ちゃうん。」

すると祖母は

「そうよー。鹿兒島弁の言葉よ。」

と言った。そこで私は、

「……大阪やのに鹿兒島弁喋るん恥ずかしくないん?」

と質問してみた。孫にすらも不自然だと思われるのに、直そうとは思わないのかと、ずっと前から気になっていたのだ。すると、

「ぜーんぜん。」

なんだか想定外の答えが返ってきた。

「むしろね、周りを巻き込むくらいよ。おじいちゃんも鹿兒島から来て、鹿兒島弁で喋るでしょ。普通は隠そうとしたりする人が多いみたいだけど、あたしは全然。」

驚いたけど、同時にすごいなと思った。聞けば、鹿兒島弁を隠している人が安心して寄って来たりすると言いつつ。

「故郷の言葉が恥ずかしいとか隠そうとか、あたしは全然思わんが。」

「おばあちゃん、それ一回目。」

くすくすと笑いが起きる。静かだった布団がまたゆれ始める。そして私は震える布団の中で思った。祖母が故郷を大切に思う気持ちを。

「ねえ、おばあちゃん。『よか』ってさ、よか言葉やな。」

「そうよーっ。」

方言ってあったかい。それは、使う人の故郷を思う気持ちが込もっているからなのかな。私も大阪弁好きだよ。三人でもう一度潜った布団の中は、汗がにじむ程あたたかかった。